

対談・無名碑をきざむひとびと

「無名碑」——これは、土木技術者三雲竜起が、田子倉ダム、東名高速道路、タイのランバン〜チェンマイ・ハイウェイの現場で奮闘してゆくさまを、彼の家庭生活との苦しい絡み合いの過程のうちに見事に、描き出した作品である。

作者曾野綾子さんは、1228枚に及ぶこの書き下ろし大作を、1968年3月、アメリカのアイオワ州で書き始めた。1969年6月書き終えるまで、土木の勉強に没頭し、作品の対象となった現場はもとより、新清水トンネル、天竜川水系小洪ダムなどにも出かけ、精力的な取材を行なっている。1966年3月、タイのランバン〜チェンマイ・ハイウェイの現場の光景に接したときの感動が、この作品を思い立った動機だと述べている。

学会誌編集委員会は、文壇でも高く評価されつつある、この作品の出版されたのを機に、女性の眼を通してとらえられた第一線土木技術者の姿や、今回のご執筆の経験談を聞くことは、会員の皆さんにも参考になる点が多いと考え、この対談を企画した。なお対談者には高橋 裕（正会員 東京大学教授）氏をお願いし、昭和45年2月25日、ホテル・ニュージャパンで収録した速記録を編集して本記事とした。

学会誌編集委員会

高橋 曾野さんのこのたびの作品、「無名碑」を大変興味深く読ませていただきました。土木技術者を主役とするこの小説の執筆にあたられた経過を通して、曾野さんのご経験をいろいろお伺いしたいと存じます。土木のエンジニアを扱った小説は、小山いと子さん、井上靖さん、吉村 昭さんなどいままでにもいろいろございますが、今回のように第一線の現場技術者の生活が、仕事と家庭生活の相互関係という中でとらえられたという例は、あまりなかったように思います。

前言はこのくらいにしまして、本題に入らせていただきます。この本のあとがきの中に『何年も前から、私の心の中にどろどろに澱んでいたテーマ』があった。それをタイ国へ行って、その『筋肉になる部分として、あの現場は用意されていた』という記述がございますが、このテーマの基調をお伺いして話の糸口としたいのですが、いかがでしょうか。

曾野 私がタイ国の現場、サラメタのチェンマイ〜ランバン第2工区に参りましたときは、現場はいろいろなむずかしい問題に直面していたときだったんでございます。私のテーマと申しますのは、実は旧約のヨブ記なんでございまして、タイの現場では一体だれが悪いのか、どっちが間違っているのかなんていうことをだれもいえない状態、そしてこのような思いをして何年間も工事をやって、みんなボロボロになったすえに道だけができるという現実、これはヨブ記だと思ったんです。ヨブ記と申しますのは、最初は非常に富裕な生活者だった義人ヨブが、生活の破綻が神を裏切ることになるかならないかという問が神と悪魔の間に交わされたことにより、突然生活が暗転しまして家族、家畜を失ない、自分もライ病

みたいな病となり大変ひどい状態になる。そこでヨブの友達が3人出てきまして「お前は悪いことをしたからこういうふうひどい目にあってるんだ」と何べんもヨブにいうわけです。そうしますと、ヨブが「いや、自分は絶対悪いことをしていない」という。すると友達が「それじゃ、悪いことをしていないのにこんな目にあうのだったら、お前はそのような神を捨てろ」という。それでもヨブは「いや、私は捨てない」というのです。ヨブ記は大体詩のような形で書いてあるのですが、42章の第7節以降は突如としてその詩のような文体がくずれ、ヨブが神に対する忠誠を経て、再び子供と家畜と豊かな生活を送れるようになる、この物語が一応の主題なんです。しかし、一部の聖書学者によると、42章以下は後世の人間が書き加えたものだそうで、私の小説は報いられない義人の物語です。

海外進出に必要な文化人類学的思考

高橋 小説の第3章、タイ国の現場の場面ですが、日本の土木技術者が海外へ行って特殊な状況の中で、本来の土木工事の技術面以外の面で予期しないさまざまな苦勞をする。この本ではそれが具体的に取扱われており、強く関心をひいたのですが、単に海外の仕事であるのみならず、それが土木工事なるがゆえの問題はどんな点でしょうか。

曾野 第一にタイ国へ出ている人間がみんな長政の時代から十官なんです。そして、多かれ少なかれ向うの士官と、つまりタイ人でありながら外国語をしゃべったり、高度な知識を有する、そういう人たちと接触してい

るわけです。ところが、土木の工場の現場になりますと、現場で労働者を使わなければならない。これは下士官どころか兵ばかりです。そういうことが第一でございます。それともう一つは、国外に出る場合は良い技術だけあればいいというわけではない。工学部の方といえども、機械ばかりでなく人間を使わなければならない。その人間がしかも日本語がわからない。帰りに焼き鳥屋に行っ一杯飲んで腹を打ち割ってしゃべるといってもゆかない。文化人類学的な理解が必要であるのに、それに対するインフォメーションが全くない。骨材はどこそこから持ってくるということはわかっていても、タイ人に関するレポートというものは持っていらっしやなかった、それが大変お気の毒でございました。

高橋 全く同感です。土木の技術者の場合、国内でも国外でもどうしても人を使わなければ仕事ができない、と同時に常にチームワークに留意しなければならない。海外工事では、その国の人々の気質を理解してはならない。もう一つは、自然を相手とする仕事であるということです。ところが、土木工事の場としての自然というものは、普遍的法則ではなかなか認識することができない。よって、地域ごとの特徴をつかまえないと土木技術者としての本当の仕事ができない。そこで、曾野さんがおっしゃったように文化人類学的アプローチが必要になってくると思います。今後の土木の海外進出に際して、その必要性を認めるとともに、容易なことではないという感じがします。

曾野 われわれ文科系の人間は、行くとなると極力関係する本を読んでゆこうと心掛けます。その意味もありまして、私この間からマルローの「王道」を読み返してみました。そうしますと、この本に出てくる時代からタイ政府の高官と結び付いているのはデンマークなんです。今度書きました「無名碑」に出てくるのもデンマークのコンサルタントなんです……。

高橋 そうですね。それで、いじめられる場面がだいぶ出てくる。

曾野 はい。たとえば「王道」一つでもう一度読み直せばスパイじゃないですけども、インドシナ半島に関するある種の真実の読み取り方というのができるは

ずなんでもございますね。こういうものの、いわゆるインフォメーションの総合というものは、思わぬ所から持っているのかもしれない、というふうに思いました。

高橋 ご存知のように、欧米からは、わが国をはじめ東南アジアの各国に多くの人たちが入り込んでおりますが、「王道」ではありませんが、アジアのことはアジア人しかわからないのかどうか、日本人なら欧米の人たちよりもっとアジアがわかるのかどうか、この辺はいかがでしょうか。

日本人はアジア人を理解できるのか

曾野 私も疑問でございます。私たちとしては、多少、たとえばヨーロッパ人よりはわかるといたい所だと思えますけれども、わかるというのはやはり曲者であって、私はいまや国際間の相互理解は絶望に近いと思っております。私個人の問題で恐縮でございますが、モーパッサンの「女の一生」に出てくる学校と同じ修道院学校（編集部注・聖心女子大学）で育ったわけです。ここで、昭和16年の開戦の当時に38カ国人が一つ屋根の下にいたわけなんです。つまり、私自身外国人というのはさして奇異でないという状態で育ったはずなんですけれども、つまり、奇異でなくなればなくなるほどわからないという絶望感がひどいんでございますね。言葉一つにしても、どうしてこういう表現をとるか、ということがわかるまで容易ではないと思うのです。わからないと絶望感にとられることもいけないでしょうけれども、わかったというのでも間違いが出てくるような気が致します。先ほどの話にもどりますが、日本人なら白人より比較的はやく東南アジアの中へ入ってゆけるという点、これはどうも……。

高橋 同じような皮膚の色であるわれわれのほうが、将来の可能性を含め有利だとは必ずしもいえませんが。

曾野 その点はどうも……。ただ、戦争中に日本が東南アジアにゆきまして、そこでよからぬことをしたことで、やはりそれ自体は一つのつながりだと思えます。憎しみが愛情に変わることもあるし、その逆のこと

● 対談者紹介



曾根綾子さん

作家

<代表作品>

「二十一才の父」（新潮社）、「一条の光」（新潮社）、「生贖の島」（講談社）、「傷ついた葦」（中央公論社）、「唯のために愛するか」（青春出版社）など。

「無名碑」は、昭和44年10月・講談社刊、A5判・442ページ、定価620円。



高橋 裕氏

東京大学教授
工学部土木工学科

もある。いずれにせよ無関心よりはいいと思います。もちろん肉体的な特徴もあまり変わりませんし、いざとなれば日本人はデータをいっぱい集めて理解するということは大変まいので、私は全然希望を捨てていないし、明らかに白人達よりは楽ではないかとは思いますが。

高橋 この小説の舞台がタイになったのには、それなりの理由がありますか。

曾野 あとがきにも書きましたが、エカフェの早生さんにお会いしたことが非常に大きかったと思います。それにしましても、人間が死んでもなお一つの命をそこに、地域社会のあとに生きる人々に残していけるんだということに、私はたいへん感動致しました。

高橋 その地域社会に足跡をはっきり残るということ。これは、それに至るまでにどんないろいろなことがあっても、ともかく結果として確実にある物が残る。

曾野 そうでございますね。このアジア ハイウェイにしましても、とにもかくにも、このどうにもならないアジアに最初の1本の動脈を初めてつくる。

高橋 すべては最初ということで苦労が伴う。

曾野 これは、小説がどうしてつくられるかっていう裏話になりますけれど、一番最初にここで工事をやっていらっしゃる会社にお電話したんです。タイではまだ小説を書こうとなんて思わなかったんです。帰ってきたらどうしてもあれなんだなと思い出して、早速お電話しまして、第2工区のデータをお差し支えない程度でおもらしいただけますかと伺ったんです。そうしたら、相手の方が大変親身になって迎えて下さいまして、過去のことだからどんなデータでもかまわぬとおっしゃっていただいたんです。それが幸運だったんじゃないでしょうか。やはり、工事の部分だけは幾らなんでもでっち上げでは、ちょっと創れないでございませぬ。登場人物は、これは逆に作家が創らねばなりません。

高橋 しかし、問題意識がなければ幾らいいデータがあっても始まらないことですから……。それからさらに小説全体の内容に立ち入るようで恐縮ですが、タイの現場へくる前段として、田子倉ダム、名神高速道路の工事が、それぞれ小説の第1章、第2章の舞台となっていますが、これらはずっと前から準備されたのでしょうか。

工事記録の裏を読む

曾野 タイの後で集めました。それまで私は全然土木に興味がなかったのかということ、どうもそうではないらしいでございませぬ。その証拠に、北陸隧道にも入っております。私、最初は海の勉強をしたんです。商船についてはわりと女でもわかる方だと思っております。そんなこ

とからか、婦人雑誌の企画で、本当に北陸隧道の取材をしろといわれて入りました。このとき、4工区のうち3工区まで入りました。

高橋 朝日新聞で、いつか東京の下水道を歩かれていますの写真を拝見致しましたけれども……。

曾野 あれは先生……恥ずかしゅうございまして、小川町のまっただ中へ出たのです。あの交差点の真中です(笑)。大きな長靴をはいて、私、どこか人知れぬ所へ上れると思ったんです。そうしたら「曾野さん、こっち、こっち」というので出たら小川町のまっただ中に……。私、恥ずかしくて……(笑)。

高橋 それはそれは。ああいう所にもともとご興味があったかなと思ひまして(笑)。

曾野 いえ、そんなに意識的じゃございませんけれど。それで、田子倉も名神も完全にできておりますので困りまして、田子倉の代りに小渋を、名神の代りに東名の川崎工区へ何度か伺って、現場を見せていただくとともに現地へ伺って……。あとは、工事記録をたんねんに読みました。たいへん便利でした。

高橋 いわゆる工事記録は主として技術的な記録が主で、裏面史がありませんね。その点はエンジニアに会って聞き込んだんでしょ。

曾野 工事記録以外は大体ヒアリングです。

高橋 私もずっと大学におりますので、一つの工事をずうっと通して見るという機会がありません。この本の中には幾つかの具体例が出てきますが、たとえば、かめ虫が機械を止める話など、いろいろと学ばせていただきました。

曾野 いえいえ、もうあとにも先にもあれっきりで……。

無名碑の意味するもの

高橋 本の標題のことですが、「無名碑」という題を私は勝手に解釈しました。名前は刻まれなくても、こういう道路とかダムが表面的に残っていく——一つの記念——土木工事というのは、結局は無名碑的なものを築き上げていく、このことによったのかと感じました。大変失礼ないい方ですが、全編にキリスト教的な一つの流れのようなものを感じました。私どもの先輩に青^{あお}山^{やま}士^{あきら}という人がおりますが、内村鑑三の教えを受け、東大を出てすぐパナマ運河の建設に参加し、その後内務省で荒川放水路、信濃川の放水路の改良工事などをしました。荒川、信濃川の工事双方とも完成したときに記念碑を建てましたが、青山さんは「絶対おれの名前は書いてくれるな」ということでして、両方とも入っておりませぬ。信濃川の工事の記念碑には『万象に天意を覚る者

は幸いなり、人類のため、国のため』とエスペラント語と日本語で刻まれております。昭和5年のことです。内村鑑三の、「後世への最大遺物」の中で述べられたこと、将来自分の生涯で後世へ残すものは何かということに対し、「高貴で勇気のある生涯」とあり、その前段の具体例として土木事業を残したい。この教えに青山さんでしたがったのだと思います。

曾野 小説書きという者は、どうしても本に名前をつけさせられてしまいます。これは何も偉いからつけるんじゃないで、文筆業というのはいわば虚業でございますから、責任を取る意味で名前をつけさせられてしまう。私、小説でも何でも、だれが書いたっていいじゃないかっていう気がするんですね。むしろ、作品だけがあって作者の名前がなくてもいいんじゃないかという気がするんです。それが何だか恥ずかしいのです。それとずいぶん昔、小さいときに「トンネルを掘る話」* という本を読んでおります。あれ、とってもおもしろかったんです。あのとき、何で感心したのか思い出してみますと、温泉余土ですか、ああいう土と戦う話とか、とにかく黙ってやっているということが好きだったんですね。私、東京の葛飾区で生まれました。私は東京人ですから、たとえば、町を歩くと、長い歴史を知っている道が多くて、ちょっと重苦しいものがある。ところが数年前に高速1号線ができて、東京の中にかつてなかった道ができたんですね。そこを自分で運転しながら走りますと、東京がとっても軽やかに美しく思います。なぜかという、ここには父祖伝来の歴史をもった横丁がないんですね。1964年ですか、突如として今までなかった空間にできた道なんです。それが大変軽やかでさわやかで、しかもそのつくった人たちは一言もいわずにだれもいなくなっている。そういう感激が美しい東京の夕暮れをドライブしながら、何度か自分の胸を襲ったことがあるんです。自分も、できたら本当は、人に知られず何かをしたいなあと思って……、それが「いき」だと思ったんです。「いき」という言葉は、いまはもうなくなりましたけれども……。

高橋 高速道路に対し、われわれに新たな評価を伺って、ついでにお伺いしたいことを思い出しました。高速道路については、土木以外の方々から賛否いろいろな評価があります。日本橋の上に高速道路を架けたことでお江戸日本橋の歴史的価値がなくなってしまった。土木技術者というのは歴史を無視してむごいことをするというような非難をかなり受けました。どうお考えになりますか。

曾野 それは、やはり現状を知らない方のいうことじゃないでしょうか。たとえば、東名とか名神をみます

* 有馬 宏著の丹那トンネル工事記録で、岩波書店「小国民のために」シリーズの1冊。

とインターチェンジの中に木を残す配慮をすとか実に細かいことがなされております。私は高速1号線がどのような経過でつくられたかは知りませんが、最初からああいうものをつぶす気で計画しないと思います。つまり、やむをえざるものがあるから、ああいう形で架けたのでしょ。それに、私いつも思うんですが、文化というものは生きている人間をも含めて考えなければいけないのであって、過去ばかり向くんだったら、もうこれは命のないことです。やはり、両方をたてるということであれば、本当にいたし方のないことだと思います。そんなに、私、土木屋さんは単純ではないと思います。このごろは。

高橋 いや、そういう評価をいただくと大変光栄の至りというか、くすぐったいというか……。

曾野 それに、日本人はわりとデリケートでございますね。東名なんか見ますと、大変デリケートな計算をしていらっしゃるから……。

高橋 東名の場合でも、跨道橋やカッピングにしても、景観との調和、ドライバーとのなじみなどに十分留意しています。でも、そういうことは案外外部の方々から必ずしも評価されていない。過去の歴史的造形を無視したとよくいわれますが、いまつくっている物自体も、将来の世代から評価を受けるし、歴史的遺物になりうるものですね。そこで、われわれは現在に生きているのだ、過去のものにしがみついているだけではないのだという意識を持っていると思います。この辺のお考えはいかがでしょうか。

生きている人々の生活を考える

曾野 それはもう十分にお考えになっていらっしゃるようにお見受け致します。日光の太郎杉のときも、私は生きている人間が大切だという意味で「切つてしまえ」と書いたら怒られたんです。私は太郎杉があることにより車がつまり事故が起きて人が死んでいるなら、何千年の杉でも切るべきですと申し上げたい。一番大切なのは、いま生きている人が一番大切だと思います。

高橋 どうも高速道路から脱線しました。「無名碑」といいますのは、最初からお考えになっていた題名でしょうか。

曾野 私、こういう仕事をやる前から、川原の堤などに腰をおろしてあたりを見ていることが好きでして、そんなとき、古い堤のコンクリートにひびなどが入っているのを見るにつけても、「ああ、いつか私たちの知らない間にだれかがここにつくってくださったんだなあ」という思いにとられる。それから、本のせいかも知れませんが、トンネルを通りますと、私、一刻一刻が切

羽だと思ひます。あらゆる地点が切羽なんでございましょう。そういうことをいったら、うちの亭主に「お前は不思議なことをいう女だ」と笑われましたけれども、走っている間中そういうことを考えている。そんなようなところですので、自然にそういう題が出てきたんじゃないかと思ひます。

高橋 「トンネルを掘る話」は僕も小さいときに読み感激した一人ですが、温泉余土なんていう言葉などは、しばらくの間、頭を離れませんでした。いまの「一つ一つが切羽」という表現、おもしろいですね。あの本を読んだからは、丹那トンネルを通るたびに、この辺で苦しんだのだなあ、とは思ひますが、切羽の連続という発想はありませんでした。その点で新幹線はちょっと早すぎますね。

曾野 私、この間新清水トンネルに入りました。ちょうど山はねの激しいときだったんです。そのとき、国鉄側が最後の測量をしていらっしやる所だったんですが、その測量のあまりの厳密さに私はびっくりして帰ってきたわけなんですけれど……。こういう経験がございまして、土合の駅を通ると「ああ、私ここにいたな」「ここで、あの連中がロングレールをひっくり返してえらい思いをしていたな」なんて思ひます。

土木技術者は出征兵士か

高橋 話題がとびますが、これはぜひお伺ひしたいと思ひていたのです。それは、この小説の中にもところどころ出て参りますが、要約すれば、3章の初めに出てくる『土木屋というのは出征兵士みたいなものだ』だったかな。

曾野 奥さんたちが置き去りにされて……。

高橋 家庭生活と土木技術者の宿命といひますか、やむをえず別居しなければならぬケースを、特に外国の生活をも含めてお伺ひしたい。

曾野 現場についていらっしやるって、そこに宿舎があつてそこに生活されている場合は、私はサラリーマンの奥さんたちより、ある意味で幸せでいらっしやると思ひました。

高橋 ほほう……。

曾野 というのは、サラリーマンの家庭というのは旦那さんを送り出しておしまいになると、旦那さんは何をしているかあんまり良くわからない。日本の男の方はたいていめめしくないから、焼き鳥屋で課長の悪口をいうことはあつても、家に帰つて女房にまで「おれはこんな目にあつている」とこぼす方は少ないんです。それはいいみたいですが、奥さんは旦那さんが何をしていらっしやるか全然わからないわけです。けれど現場にいら



っしやる時、奥さんは旦那さんがどんなに苦勞しているのかをとにも身体で知つて生活をつくつてゆける。雪の降つた日は、自分も送り出してゆけば寒いし、そういうこともわかるので、ある意味では幸せな奥さんだと思ひます。ですから、これはないものねだりになるかも知れませんが、できるだけ単身赴任はおやめになつて、土木業界もその方向で努力をしてゆけば、いろいろいわれる悪いイメージもなくなつてゆくと思ひます。一般の人が誤解しているのは炭鉱と土木の現場がいっしょになつていると思ひます。やはり、将来にかけては家族赴任という形だろうと思ひます。その場合、日本人は教育熱心すぎて、子供がよい学校へ行かないとだめだとか考へますが、外人はどうもそうじゃないらしい。平気で、どんな所へでも子供をつれて行つて、その環境がすなわち教育的な環境であると思ひますらしい。これは、大変私うらやましいように思ひますけれど……。

高橋 これは土木に限りませんけれども、ご主人は東京以外の勤務地にて、奥さんと子供が東京にいる。主として子供の教育のためでしょうが、何が教育かという意味で考へさせられますね。

曾野 教育というのは、やはり学校ばかりではなく、お父さんが参加している工事を見るというのは、私は大きな教育だと思ひます。本当は……。

高橋 いやいやどうも。曾野さんはいわゆる「教育ママ」らしくなくて安心しましたが、「教育ママ」は一

流大学へ子供を入れることが教育の第一目的であると思っているようですね。どう考えてもそうとしか思えない。父親の仕事を見せるといってもやはり重要な教育でしょうね。

曾野　そして「尊敬する人はだれか」と問われたときに、やはり「お父さん」というのが一番正しいんで、「シュバイツァー」なんて答えるのは日本の教育が悪いんで、偉い人だったということになっているけれども、一緒に暮してみたらどんなインチキかまやかしかわかりませんから、そういう人は偉い人とはいわないほうがいいと思うんです。

高橋　そういうことを含めると、土木屋の奥さんは幸せですかね。

曾野　農村の奥さんと土木屋さんの奥さんは、一緒に暮らしていて、一緒に仕事をできるということで、大変幸せだと思います。

高橋　農家と同じように、土木の分野へもお嫁さんがきたがらない風潮もあります。「土木屋さんにお嫁にやると苦労が多いでしょう」という相談を比較的年配者から受けます。女性で土木屋になりたいという話もチラホラ聞く今日ですが……。

曾野　女性の場合、結婚して続けるとなると本当に困ると思います。単身赴任というわけにもゆきませんし。

高橋　奥さんが外交官ではやはり困るでしょうね。旦那さんが外交官であれば「行ってくるよ」で済むけれども……(笑)。そういう意味では、曾野さんから幸せだといって下さると大変心強いです。

曾野　離れているというのじゃ、私は海運業が一番ひどいと思うのです。これは、一年以上も離れている方もありますしね。大変な問題だと思います。この意味で、建設業の中に家族赴任の雰囲気や育ってきていることは、まだまだ救われると思います。それに、奥さんが現場にとけ込む意気込みがありませんと……。

女はトンネルに入れない？

高橋　今度土木のことをいろいろとご勉強なさったと思いますが、この小説を書かれる前と現在では、土木屋に対するイメージが変わりましたか。

曾野　私、さっきも触れましたように海運のことを勉強させていただいたときに、「マドロス」という言葉で呼ばれるような前近代的な一つのイメージが、全く違うことがわかっていました。土木屋さんにしましても、一般の方は大変荒っぽいや、何かときにはけんかもしたり、俱利伽羅紋だとか、たとえば映画でつくとそうなるようなイメージがなきにしもあらずでしょうけ

ど、私はそんなことはあるはずないと思っていました。

高橋　かつては、そういう雰囲気や支離滅裂だったでしょう。

曾野　船のときにわかったんですが、今日の海運業を支えている方たちが実に進歩的な堅実な方たちだということ、裏の裏までわかったんです。そういう経験をしたうえで次の世界を勉強させていただいたものですから……。

高橋　最初からいわゆる偏見はなかった……。

曾野　あんまりなかったんですね。しかし、女がトンネルに入るなんていうことについていやがられました……。私、前から知っていましたが、どういう扱いを受けるかと思って最初に北陸隧道に入るとき注意しておりましたら、世話やきかだれか1人が変なことをいいました。私、わからないふりをしていましたら、相手も何もいいませんでした。その後、何度も現場へ参りましたが、このようなことはそれ以後は一度もございません。

高橋　そうですか。それこそ幸いでした(笑)。

曾野　服装も全部カーキ色のものを持っておりますので、気がつかないのでしょうか(笑)。

高橋　心がまえが違う(笑)。

曾野　一つの現場へゆくと、事務屋さんもいらっしゃるし、電気屋さんもいらっしゃるし、機械屋さんもいらっしゃるし、それがそれぞれの立場で話して下さることが、オーケストラの完全な演奏を聞くように、とても個性があっても楽しくて、いやな思いをしたとか、裏切られたというようなことは一度もなかったんです。私、閉所恐怖症ですので、本当はトンネルとかなんかはとても恐いんですけど……。

高橋　技術の描写という面からだけ申しますと、第1章の田子倉ダムは工事記録のルポルタージュとしても興味深く読めますが、ヒヤリングなどの面で苦労された点はどんな所でしょうか。

曾野　そうおっしゃっていただいて大変嬉しいのですが、ごめいすけれども、実際はずいぶん削ったんです。たとえば、パッチャー プラントの能力がどうであるとか、グラウト工はどのといていまして、普通の方がお読みになっても雰囲気はわかっていても、どうにもならないような場面などは削ったんです。それと、玄人の方が読まれて「まあ、まあ」という所でとめる、その境目がたいへんでございました。それともう一つ、小説というのは事実が正確であればいいんじゃないんでございます。人物などは皆私の創作でございます。事実が正確であるということは、文学的には何の価値もありません。これを忘れてしまうと、こういう小説はだめになってくるとおもいます。この点が、一番苦労したことじゃないか

と思います。ここで扱った工事の場面は、一般の人が何かに置きかえて、たとえば自動車を今月100台売ったとか、おかみさんだったら、私は今月着物を5枚縫ったとか、そういうことに置きかえられるものだけをピックアップしていったわけでございます。

高橋 つまり、自分の生活と対比して、ある程度の共感を持つようなプロセスを追ってゆく……。

曾野 できればそうしたいというふうに考えました。

子供に見せたい男の職場

高橋 先ほど「子供の教育には、父親の現場を見せるのが第一だ」という大変コクのあるヒントを伺ったんですが、若い土木技術者のために、奥さん教育へのヒントはどうでしょう。

曾野 国内では、奥さんに旦那さんの仕事のことを勉強をさせることが第一だと思いますね。教えると、人間というのは興味を持ってきて「門前の小僧」でいろいろ都合のよろしいことを覚えます。だから、そうなることが、その地域社会と結びつけ、旦那さまの職業を理解なさるうえに一番大切なことだと思うんです。外交官の場合と同じで、やはり好奇心を持っている女であるかどうか最大の要訣だと思うのですね。こういう所で悪口を申し上げてはいけないのですけれども、日本の外交官の中には好奇心のない人もいらっしゃいまして、私どもお見かけするところ、その国に何年いらしても、その国のサラリーマンないしは労務者が何を食べているかということは全然ご存知じゃないような方が多くいらっしゃる。ですけれども、現場の奥さんというのは、着いたその日から、やはり労務者や普通の人たちがどんな所に暮らして、何を食べて、どういう行事を楽しんで生きているということについて、ご自分が語学を学ばれると同時にとけ込んでいかねなければいけない。もっともっと、きめ細かな活躍をしなければならぬ外交官だと思います。そういうことが旦那さんの仕事に役立つ。つまり、「お寺さんのことないがしろにしたら労務者が動きませんよ」とか「こういうことをいうと、この国の人は大変喜びます」……とか、いろいろあると思うんです。

高橋 なるほどね。

曾野 私、タイへいったとき感じたんですけれども、日本人は現地で民主的すぎたんです。小説の中でも所長に代役をさせましたが、植民地時代のイギリス人みたいに横暴な恐怖政治みたいなことをしたほうがうまくいくかもしれない。あるいは、いま日本人は金ピカの物を嫌いますが、タイに赴任するときは下らないことなんですけれども金ピカの時計、金の指輪、金縁の眼鏡を

かけたらどうか。タイ人は金のものをつけている人を尊敬するらしいんです。こういったことはつまらないことなんですけれども、つまらないと思いつつ利用できることもあると思うんです。そういう情報を集めていらっしゃるの、本当は奥様のお仕事。ですから、そこまできになつたらいいですね。

高橋 旦那さんは幸せですね。

曾野 会社も、女房の費用を出しても決して無駄ではない。

高橋 旦那さんは、家に帰って「今後はタイへ行くぞ」というと。

曾野 女房は、タイ国に関するいろいろな資料を調べ、仕事の一端をになう。そうしますと、仕事の分担させられたということで、とても女にとって生きがいもありますし、少し出しゃばり女になる可能性はありますけれども、旦那さんにしても利用価値はあるんじゃないかというふうに思うのでございますけれど……。

高橋 さっきちょっと出ましたが、日本の旦那さんは辛い仕事のことは、なかなか家ではいわない。はにかみ屋でもありますから……。

曾野 雄々しいんですよ。本当なんですよ。日本の男の方、わりとそういう所は男らしいですね。

高橋 自慢話もなかなかしないですね。

曾野 だから奥さんが「あなた、今日なにをしてたんです」というと「いや、飲んでた」なんて…(笑)。そうすると、旦那さんいつも飲んでいるみたい(笑)……。そういうもんじゃないわけで……。

高橋 本当に飲んでいるのかも(笑)。

曾野 結婚以来なにも勉強したことのない奥さんになってしまわないためにも、土木の奥様方は大変いいチャンスをお持ちじゃないかと思うのです。

高橋 それをしないと、奥さま方は子供の教育にばかり専念したり。それも、本当の教育ならいいですけど……。

曾野 奥様が勉強なさると、子供にもその土地土地のことを社会的に教えることもできますし、家庭生活も話題が豊富になる。そういうチャンスがとてもおありになるように思うのでございますね。ご一緒にいらっしゃりさえすれば。

高橋 どうも、大変いいお話を承りました。今後とも、土木のテーマを題材にいただければ幸いです。

曾野 こちらこそもっと勉強させていただきますようお願い致します。

高橋 ありがとうございます。